

ムサビの教員が選ぶ  
美大生におすすめの本

Recommended books for art students.

言語文化研究室  
藤田尊潮教授

『テレーズ・デスケルウ』（講談社文芸文庫）

フランソワ・モーリアック〔著〕、  
遠藤周作 訳、講談社、1997



テレーズは年若い美貌の才女でベルナールの妻である。しかし平凡な暮らしに満足できず、ある日夫が水薬の滴数を間違えたのを見過ごしたことから、次第に彼女自身にもわからない殺意が芽生え、処方箋を偽造しベルナールに毒を盛り始める。夫は大事にいたらず、回復するが、テレーズは訴えられる。しかしブルジョワ家庭の体面を重んじるデスケイルゥ、ラロック両家の画策により「免訴」となる。テレーズは自分がなぜ罪を犯したのか彼女自身にもわからない。彼女は心の闇の中に踏み込んで行く。フランスで20世紀フランス小説傑作ベストテンに選ばれ、ノーベル文学書も受賞したモーリアックの代表作。小説家は書き出しの序文で「おまえを残して行く歩道で、せめておまえが孤独ではないということを願っている」と記しているが、この「歩道」は小説の書き出しでテレーズが裁判所から出るとき最初の一步を踏み出す「歩道」なのか、小説の最後でパリに残され、ひとり歩き出すその「歩道」なのか、読者にはわからない。最初と最後の状況の一致、この小説の円環の構造は小説の持続時間を無化する。テレーズは言う、「わたしには歳なんてないんだわ」と。

『愛の砂漠』

モーリヤック〔著〕、遠藤周作 訳

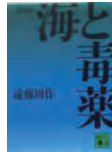
『モーリヤック著作集 第1巻 新装版』  
（春秋社、1998）所収



美貌の未亡人マリア・クロスはラッセル氏の妾だった。彼女の主治医クレージュ医師はほのかな恋心をマリアに抱いている。マリアは、クレージュ医師の息子レイモンとはほぼ同じ年頃の息子を亡くしていた。その息子の墓参りから戻る途中の列車の中で、中学校からの帰るところのレイモンに出会う。マリアはレイモンに息子の影を求めつつ、ほのかな恋心を抱く。マリアはレイモンを自宅に呼び寄せようと画策する。レイモンもマリアに惹かれて行く。だがしかし、レイモンと近づきになったとたん、男をむき出しにしたその欲望に接し、今度は彼を遠ざけるようになる。思いを遂げることでできなかったレイモンは、復讐を誓う。一方でクレージュ医師もその思いを遂げることはできなかった。医師はキリスト教的倫理観と自分の恋情の間の葛藤に苦しむ。『テレーズ・デスケルゥ』とともに、人間の情念とキリスト教の信仰の葛藤を描いたモーリアックの傑作。「神」を求める心に対比させるかのように、モーリアックは人間の本性を「獣」のイメージによって描き出す。

『海と毒薬 新装版』（講談社文庫；え 1-46）

遠藤周作〔著〕、講談社、2011



「私」は新宿から1時間のところにある郊外に引越しをしてきた。肺結核を患っており、肺気胸療法を受けていた。医者を探していたところ、妻が医者を見つけてきた。勝呂という医院である。小さなモルタル作りの病院だった。勝呂医師は40歳くらいだが、老けた感じのする男だった。無口で、話すと言葉に妙ななまりがあり、どこか蒼黒い顔をして、陰気な感じがした。ただ気胸針を刺す腕は確かだった。「私」は不思議に思い、勝呂医師を調べることにする。小説のテーマは昭和20年九州のF医大で行われたアメリカ軍の捕虜の生体解剖事件である。勝呂もそれに消極的ながらもそれに関わっていた。解剖実験の最中、そしてこの小説全編を通して勝呂たちが感じる「けだるさ」と「良心の麻痺」。小説家遠藤周作の初期の代表作であるこの小説はモーリアックの強い影響下で書かれた作品である。「罪を知らない人々」の「救い」の可能性と「神なき人間の悲惨」。パスカル＝モーリアック的なテーマが遠藤氏なりに解釈され、独自の小説のヴィジョンとして展開されている。

『金閣寺 新版』（新潮文庫；み -3-8）

三島由紀夫 著、新潮社、2020



「私（溝口）」は舞鶴から東北のうら寂しい岬町で生まれた。父は岬の小さな寺の住職であった。私は幼い頃から父に、「金閣ほど美しいものはない」といわれて育つ。「私」には幼少期から吃音があり、それがコンプレックスで人と関わることが苦手で、いつもひとりぼっちだった。父の遺言どおり、「私」は京都へ出て金閣寺の徒弟になる。そこから大谷大学に通わせてもらうことになり、ふたりの対照的な友人と出会う。ひとりとは鶴川といい、純真で「私」の吃音を気にもせず、素直に受け入れてくれる。もうひとりとは柏木という学生だが、彼はたちの悪い悪童で、足に障害があった。柏木は世慣れていた。女の扱いも心得ている。「私」は有為子という美しい娘を恋していたが、有為子は脱走兵をかばったために憲兵に殺される。しかしその後も有為子は女性の「美」そのものとして「わたし」の脳裏につきまとう。そしてまた金閣は「美」そのものとして不具なわたしにつきまとい続け、わたしを苦しめる。「私」は旅に出る。裏日本の寂しく冷たい海を見る。突然ある想念が浮かぶ。「金閣を焼かなければならぬ」。「私」は金閣放火を決行する。「私」は言う、「生きようと私は思った」と。三島由紀夫の最高傑作であると同時に昭和文学の金字塔。『金閣寺』は意味の射程の非常に短いことばを緻密に組み合わせた独特な文体で書かれている。まるで美しい小さな宝石のことばで構築された巨大なことばの細密画のようである。

『小さな王子：新訳「星の王子さま」』

アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ〔著〕、  
藤田尊潮 訳、八坂書房、2005



第二次世界大戦のさなか、1940年6月の休戦協定を受けて動員解除になったサン＝テグジュペリはアメリカに渡る。彼はレイナル・ヒッチコック社から『戦う操縦士』の出版を予定していた。サン＝テグジュペリがカフェのテーブルクロスに落書きをしているのを見かけた社長カーチス・ヒッチコックは、「その少年を主人公にクリスマスの童話を書いてみないか」と彼に提案する。偶然に童話を書くことになったサン＝テグジュペリは挿絵も自分で描いた。『聖書』について歴史上世界最高の発行部数を誇る傑作の誕生である。物語は「大人」と「子ども」に始まり、「目に見えるもの」と「目に見えないもの」というイメージの対称性を軸に展開する。アレゴリックな6つの星の住人たち、彼らはみな「目に見えるもの」ととりつかれた「おとな」である。孤独な「おとなたち」を背景に、キツネは「飼い慣らすこと（仲よくなること）」を「絆を作ること」と王子さまに教える。「心でみなくちゃ見えない」「絆」の存在に目を開かれた王子さまは、「わたし」にもその「秘密」を教える。限りなく澄み切った美しい夜空の星々を背景に、サン＝テグジュペリは人間同士がもう一度互いに結び合うことに人生最後の望みを託した。この作品はクリスマスの童話であるということにも関係があるが、多くの点で『聖書』が背景にあるということを言い添える必要があるだろう。

『完訳 ファーブル昆虫記（全10巻）』

ジャン＝アンリ・ファーブル著、  
奥本大三郎訳、集英社、2005-2017

TAC（津田塾、東経、外語大）に所蔵あり。  
当館にはジュニア版の所蔵あり。



スカラベ（糞虫）の行動の中に「神」を見た人の書として、このジャン・アンリ・ファーブルの『ファーブル昆虫記』を紹介したい。1878年から1907年にかけて書かれ、出版された本だが、その内容は21世紀の今にいたっても色あせることがない。いやむしろ、自分の目でものを見、ただひたすら観察し、それを記述するという行為が消え去ろうとしている今だからこそ光彩を放つ。この本を読み進めていくうちに気づくのは、テーマは本能についての考察だったということだ。糞虫スカラベの作る完璧な球体も、軍隊よりも整然とした行列を作る虫も、本能の申し子だ。では、わたしたち人間はどうだろう？「神は人間に自由をお与えになった。それは人間を信頼していたからだ」と、わたしの友人の神父は言うが、はたしてわたしたちは与えられた自由をどのように使っているだろうか？